山と博物館

第47巻 第4号 2002年4月25日 市立大町山岳博物館

1階「北アルプスの山小屋」内 登山の道具に触れられる「体験コーナー」

この4月から市内の博物館や図書館など各施設を週末や夏休みに巡るバス「子ども体験学習号」の運行が始まりました。山岳博物館では、バスの到着時間にあわせて展示室でスタッフがお話をします。写真は、これに合わせて設けた子ども向けの体験コーナーの様子です。

展示の改修を終えて

柳澤 昭夫

実行委員会をはじめ、関係各位のご尽力を得て、山岳博物館五十周年事業は、最後の展示改修をもって無事終了することができました。これも一重に、関係各位の熱い想いに支えられたことと、あらためて深く感謝し、厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

諸先輩方々の血のにじむような努力で成しとげられた調査研究活動の成果、長年に渡って集積してきた貴重な資料、何よりも、地域の人々に支えられ、ともに展開してまいりました博物館活動そのものが、博物館が培ってきた貴重な財産であると思います。

五十年を節目に、また新たな一歩を進めるにあたり、博物館はこうした歴史の上に何をどのように構築し、どう展開していくべきか摸索していかなければなりません。

長きに渡って博物館はこの地の人々に愛され、支えられ、発展してきたように、これからも皆様のお力添えをいただき、ともに歩んで大町の誇りでありたいと考えております。今後とも、叱咤激励とともにご指導下さるようお願いいたします。

本年、大町市は山岳文化都市を宣言いたしました。新たな山岳文化を創造する活動は、博物館の重要な使命であります。恵まれた自然環境の中で、自然との共生をどう図るのか、環境教育はどうあるべきか、これもまた新たな課題であります。

このたび、里山から高山まで自然科学系を中心に展示をリニューアルしました。展示による教育活動は、博物館の基幹であります。資料を充実し、調査研究を一層推し進め、その結果を展示に反映してゆく努力を積み重ねていかなければならないのは言うまでもありません。著名な海洋学者レイチェル・カーソンは、『沈黙の春』という本の中で、生物とその生態系が変容していく環境ホルモンの脅威について警告しております。有害化学物質によって汚染されていく宇宙船地球号を救うためには、次代を担う子どもたちが感性を磨くことだと述べております。今、体験学習の重要性が提起されております。そうした自然と触れ合い、感性を高める博物館のあり方について摸索して創り出していきたいと思います。博物館そのものの力は小さいものです。この地の方々の知恵と力を借りて、こうした課題に向かっていきたいと思います。

（大町山岳博物館館長）

新展示の見どころ紹介

大町山岳博物館

大町山岳博物館では、平成十三年十一月に創立五十周年を迎え、昨年より企画展やイベントなどの記念事業を行ってきました。これらを締めくくる最後の事業として、今年一月より館内の展示改修工事を行ってきましたが、このたび工事が終了し、去る三月十六日に新規オープンいたしました。今回の展示改修では、「山岳の自然」をテーマにした二階の第二展示室を中心に展示改修や展示替えを行っております。ここでは新展示の見どころについて写真を交えながらご紹介します。

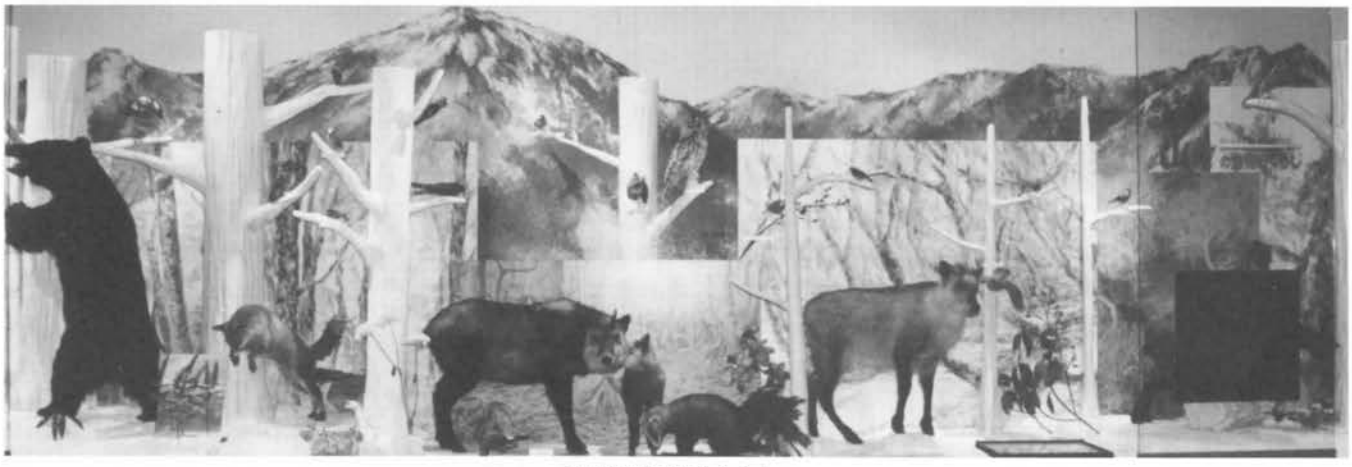
第二展示室「山岳の自然」（二階）

これまでのガラスケースを使った展示方法を一新して、鳥や獣の剝製などをジオラマ形式で展示しています。北アルプスの里山から高山、渓谷・湖・湿原などさまざまな環境とそこに生息する動物たちをわかりやすく紹介しています。

展示は剝製が引き立つように白黒（モノトーン）を基調とし、動物が生息している環境（植生）が想像できるような配置としています。そして、生き生きと動きのある姿をした剝製からは、捕食など食物連鎖を通した生活の一端を垣間見ることができ、気候や植生、昆虫、鳥、哺乳動物など複雑に係わり合う自然（生態系）に興味が持てるようにしました。

さらに、「里山から高山の生物のくらし」までのコーナーと、「渓谷の生物」のコーナーには、三ヵ所で、人の動きをセンサーで感知し、鳴き声とスポットライトを連動させた小鳥（オオルリ・コマドリ・ミソサザイ）を設置しました。

「北アルプスのかたち」（右）、「北アルプスの生いたち」



「山地の生物のくらし」

また、近年、身近な田畑の周りや里山においても多くの動植物が姿を消しつつあります。そこでこの展示を通して、野外へと目を向けてもらえるような（例えば、北アルプスの山々などへ足を伸ばすきっかけ）、あるいは野山を歩いてきた方へはそこで生じた疑問についての解決の場として、自然保護や自然との共生、地球規模での環境問題を考えるきっかけとなればと考えています。

それでは、各コーナーの概要について実際の展示にそって説明していきます。

「北アルプスのかたち」

二階への階段を上ると正面に「槍ヶ岳」の大きな写真を背景に、現在の北アルプスを代表する地形、周氷河地形や線状凹地についてと山頂の岩石を展示しています。

「北アルプスの生いたち」

ここでは、北アルプスの過去について（歴史）、北部フォッサマグナのでき方（グラフィック）と北アルプス周辺の化石・岩石について展示しています。

次のコーナーからは北アルプス山麓の人家周辺から標高の高いところへと連続して展開していきます。

「里山の生物のくらし」

周囲にはヤマツツジやヤマブキ、キブシが咲き、身近な鳥であるハシブトガラスとハシボソガラス、キジとヤマドリ、キレンジャクとヒレンジャクの形態について比較できます。

雪が解けるとカタクリやキクザキイチゲ、ニリンソウが咲き、木の根元でじゃれあう

タヌキの親子、ササ藪の中にいるキツネの仔、ヒヨドリを捕えたオオタカ、アカネズミを捕えようとするフクロウなど生き生きとした姿を見ることができます。

「山地の生物のくらし」

ブナ林の林床には多雪地を代表するハイイヌガヤやエゾユズリハなどが生育し、ここから亜高山にかけては、北アルプスを代表する哺乳動物ニホンカモシカを中心に展開し、親子、木の幹に角や眼下線をこすりつけなわばりを示すサインをつける姿、座って反芻している姿など様々な生活の一端が分かりるような剝製を配置しています。

ミネザクラの花を食べようとするヤマネの姿、鳥類ではヨタカやフクロウ、アカゲラなどの木の枝や幹のとまり方の違いを見ることができます。

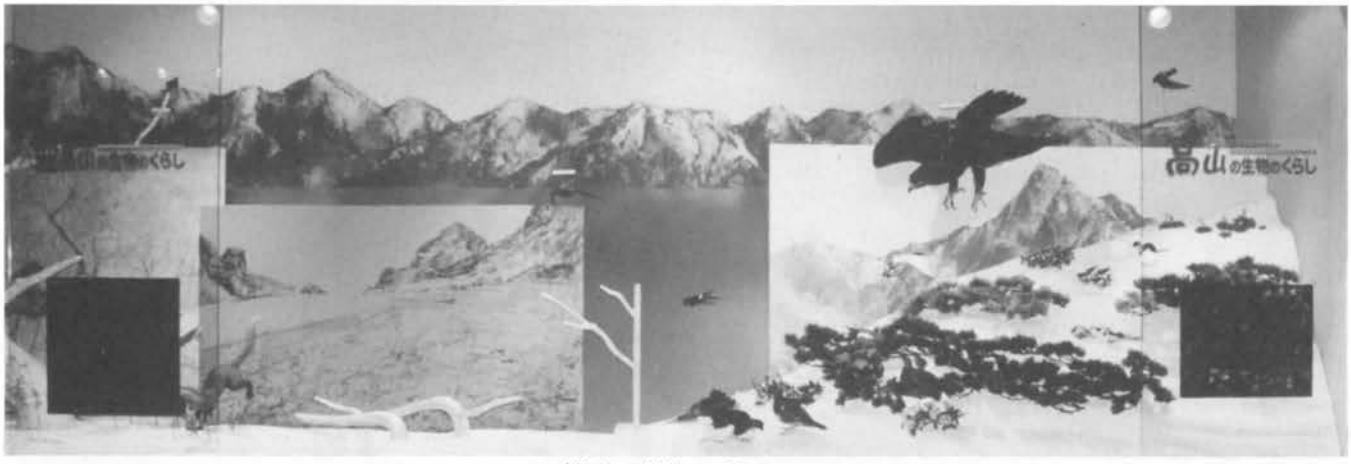
「亜高山の生物のくらし」

針葉樹林下にはゴゼンタチバナやヒロハユキザサなどが咲き、お花畑ではミヤマキンポウゲやクルマユリ、ハクサントリカブトが見られます。木の高い場所にとまる肉食の猛禽類と、藪の中などを主な生活場所にしている小鳥など食物連鎖など位置関係について考えることができます。

木の幹の穴で丸くなって眠っているヤマネも探してください。

「高山の生物のくらし」

北アルプスの高山を代表する鳥ライチョウを中心に展開しています。周囲には餌となるミネズオウやコメバツガザクラなどの高山植物が咲き、ライチョウの繁殖期のディスプレイの姿や、どんな場所に巣を作っているのかがわかるような背景の孵化直後の雛と雌親、真冬の姿などのほか、上空から



「高山の生物のくらし」

「渓谷の生物」

「パレットライブラリー」

狙うイヌワシ、岩陰に潜むオコジョなど天敵関係にある動物のほか高山の稜線部を自由に飛び回るハリオアマツバメやアマツバメの姿も見ることができます。

「パレットライブラリー」

書籍のように背表紙にタイトルが書かれた二十個の木箱を開けると実物標本やレプリカ、イラストを手に取り、まぢかに見ることができます。小学生にも興味が持てるように分りやすい内容で自然の不思議について解説しています。テーブルで、これらと一緒に置いてある図鑑を組み合わせて調べたり、メモをとったり、お申し込みいただければPCでの検索も可能で、小・中学校週五日制や総合学習の場所としてもご提供しています。

展示室中央部にはライチョウの生活のジオラマと、触れる剝製コーナーを移設し、ソファもご用意していますので、展示を眺めながらおくつろぎいただくこともできます。

「渓谷の生物」

高瀬渓谷など切り立った川岸と急峻な流れをイメージし、林縁にはタニウツギやホンシャクナゲが咲いています。

上流に頭を向けて泳ぐニッコウイワナとヤマメ、今にも水面に飛び込みそうなカジカガエル、藪の中で囀るミソサザイ、川の上に張り出した木の枝から魚を狙うヤマセミがいます。

「湖の生物」

仁科三湖（青木湖・中綱湖・木崎湖）をイメージして作製し、水深によって植生の変化を観察することができます。

湖から流れ出す河川に生息するヌマカイメ

ン、幼生の時にヤマメのエラに寄生するカワシンジュガイは餌を採るために貝の開口部を上流に向けて砂地に立っています。

水面から飛び立つカルガモや近年木崎湖でよく目にするカンムリカイツブリが、水中にはキザキマス（これは日本固有の野生種ではなくヤマメと放流されたアマゴやビワマスなどとの雑種といわれています）やコイ、テナガエビなどがいます。

「湿原の生物」

安曇地方でも大北地域には居谷里湿原（長野県天然記念物）をはじめ、多数の湿地・湿原が見られます。ここでは湿地を代表するミズバショウやザゼンソウが流れに沿って生育し、日当たりの良い場所ではミズゴケ類と混生して食虫植物のモウセンゴケを見ることができます。木の上には産卵を終えたモリアオガエルと卵塊が、湿地の草には地面すれすれに飛ぶハッチョウトンボ（日本で最も小さいトンボ）が見られます。

「タペストリー」

それぞれの環境を章立てしたガラス面には、身近な植物から高山植物に至るまで、ジオラマに盛り込めなかった植物について、１００枚を越える写真を用いて花や果実、樹皮（じゅひ）を紹介しています。

「ミニ企画展コーナー」

常設展示で扱っていない内容や、学芸員の調査研究の発表の場として随時展示内容を変更する予定です。現在は世界のライチョウ展を開催しています。

「遭難」

「エベレスト周辺の地形模型」

ホール・特別展示室「山と芸術」（一階）

ここは絵画やピッケルの名作などを気軽に楽しんでいただける空間となっています。

山岳画家たちの絵画や山道具などを展示。ピッケルのコーナーでは、スイスと日本の古典的な作品を紹介しており、平柳一郎氏の収集資料を中心にして定期的に展示替えを行なっていく予定です。

第一展示室「山と登山」（一階）

「近世以前の山と人」

大町周辺の縄文人が使用した石器とその原石を紹介するほか、上原遺跡（大町市大字平）のストーン・サークルなどに立石として使われた矢沢石を展示。また、須沼氏居館跡Ⅰ（大町市大字常盤）で発見された錫杖の頭をはじめて展示しました。これは山麓の修験者が室町時代に使用したものと思われます。

「遭難」

昭和初期から中期に発生した山岳遭難で、大町周辺や上高地など北アルプスに関する四つの遭難を紹介。具体的には「篭川谷の雪崩遭難（昭和二年）」「松濤明の手帳（昭和二十三年）」「ナイロンザイル事件（昭和三十一年）」「槍ヶ岳北鎌尾根の二重遭難（昭和三十七年）」に関する実物資料を展示しています。

「エベレスト周辺の地形模型」

既存の地形模型をコンパクトにして地名や登山ルートを書き込み「エベレストへの挑戦の歴史」がひと目で分かるようにしました。そして「エベレスト登山をめぐる困難な問題」と題して、高所順応や装備・食糧の運搬などの問題点を分かりやすく紹介しています。

また、日本人によるエベレスト登山の中から、日本山岳会隊（昭和四十五年）と群馬県山岳連盟隊（平成五年）を取り上げ、装備などを多数展示しました。

「山のコラム」

今までの展示ストーリーに織り込めなかった貴重な資料を山のコラム集として新たに展示。趣向を変えた展示で、ひと息ついていただける新コーナーです。

このほか「北アルプスの山小屋」の一角の板壁を切り取ることで、外から内部が見通せるようにしました。今後は、ミニ講座や来館者とのコミュニケーションの場として山小屋を積極的に活用する予定です。

お知らせ

山岳博物館友の会で運営する「喫茶こまくさ」が四月十三日より営業をスタートしています。展示改修にともない、二階から一階へ場所を移動しての新規オープンです。喫茶のみのご利用もできますので、お誘い合わせの上、お気軽にご利用ください。

また、市内在住の小・中学生と六五歳以上の方は博物館への入場が無料となっておりますので、ぜひ新しくなった展示をご覧ください。

人事異動のお知らせ

平成十四年三月三十一日付で倉科和夫館長が退職し、四月一日付で柳澤昭夫専門指導員が館長に就任いたしました。

山と博物館第47巻第4号
二〇〇二年四月二十五日発行
発行　〒　長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
FAX〇二六一―二二―二三三
印刷　大糸タイムス㈱
定価　年額　一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三一九三